

第1-2部 パネルディスカッション

【稲積】

皆さん。ただいまからパネルディスカッションに入りたいと思います。

休憩時間に皆さんから御協力をいただきまして、たくさんの質問をいただきました。時間に制約がありますので、全てにお答えできないのが残念ですが、どうかその点はお許してください。それではまず奥田さん、それから友廣さん、続けてお答えいただきたいのですが、お二人が「それぞれの支援場所、拠点を選ばれた理由を教えてください」という御質問でございます。まず奥田さんからどうぞ。



稲積謙次郎さん

【奥田】

はい。先ほども申し上げたのですが、支援場所、拠点などは選んでおりません。ちょっとしたきっかけがあって、たまたまそこになったということなのです。私が最初に申し上げたように、偏った支援を行うという活動理念を書きましたので、現地のスタッフからも偏っていいのかという問いがあったのです。そこで、私はそのスタッフに「君は彼女いるか」と聞きましたら、生意気に「いる」と答えまして、「では君はその彼女を客観的に選んだのかね。世界中の女性を順番に並べて一番いい人を選んだというのかね」と言いましたら、「いや例外です」と答えましたので、私は「そんなものだ」と言いました。

これと同じで、たまたま出会っただけなのです。理屈でいうと非常に小さな島だった、浜だったというものもあるのですが。ただその偶然の出会いにどう責任を取っていくかということが重要でありました。逆に言うと、その近隣の浜からは「なんであそこだけに支援が来るんだ」という声が当然上がりました。ですが、私は人と出会って一緒に生きていく上で、そういうリスクは負わなければならないと思っています。

綺麗に収まる出会いって危なっかしいと思っていますので、ある意味誰かと出会うと、隣の彼女から刺されるかもしれないという、そういうリスクも伴うということでやってきました。

【友廣】

はい。僕も先ほどの報告の中でお話しさせていただいたのですが、僕は、当初避難所をずっと回らせてもらっていたのですが、客観的に状況は分かってくるのです。数字的なものであったりとか、なんとなくこういう状況にあるという感覚的なものであったりとかで把握できるのですが、その中で一体、自分に何ができるのかとか、自分はどうすべきなのか、自分という人間がどう動くべきなのかは全然分からなくて、エネルギーの矛先をどこに向けていいのかも分からなくて、自分の中で焦燥感みたいなものがあった時に、たまたま僕のことを求めてくださる人たちに出会えたので、ここで一つ形にしたいなと思って動き始めました。

次の牧浜のほうは、僕が活動を初めて一度東京に帰った時に、石巻の河南出身で大学を9月に卒業して、春に就職するまでの半年間、地元で何か活動したいという女性に出会ったのですが、その彼女のお母さんが教師で、そのお母さんの初任地が牧浜の集落だったんですね。その彼女のお母さんといろいろと話をしていく中で、牧浜の人たちが何かこういう仕事を作れないかと思っているという話をお聞きして、それだったらということでお会いしに行き、そこでいろんなことが重なり支援につながりました。本当に御縁でしかないです。

僕らは本当に小さい、弱小なチームですので、たくさんの人に対して何かをするということではできません。自分たちでできる範囲のことしかできないということ、何かある種の諦めみたいなものを持った上で、できることをやっつけていこうというふうに進んでいきましたので、この出会いは本当に御縁

だったと思います。

【稲積】

それでは次に鈴木さんです。「避難所を多くしてはならないという理由をもう一度お聞きしたい」とのことです。

【鈴木】

ありがとうございます。スライドの枚数に対して、基調報告の時間が非常に短かったものですから、うまく伝わらなかったのではないかなと思います。

私がお伝えしたかったのは、避難所の数を多くしてはいけないのではなく、避難所の転居回数を多くしてはいけないということです。大規模災害発生時というのは、想定していた避難所が不足してしまいます。今回の震災では、海岸付近にあった指定避難所は全て壊滅しました。大槌町の場合、一番高い所で約22メートルの津波が来たのです。ですから避難所に指定されている公民館や小学校の多くは使えなくなりました。小学校については、5つのうち4つが使えなくなりました。

また、この3.11というのは非常にタイミングの悪い日だったなと思います。それは年度末を迎えて卒業式の練習を行っていたり、小学校1、2年生は午前中で授業が終わり、給食を食べて終わったらすぐに家に帰る日でもありましたので、小学校に子どもを迎えに来たお母様と一緒にお子さんが亡くなるケースがありました。話を戻しますと、公共施設がほとんど使えなくなってしまった状況で、8,000人もの人々が避難しなければいけないという事態に耐えられるような避難所はありませんでした。そのため、避難所に駆け込んだものの、ここは既に一杯だからと入ることを拒否され、もっと高い所に、山の奥の方の避難所に行ったりするなど、転々と移動せざるを得ない方がいました。

私たち保健師は、2011（平成23）年から今後10年間、被災者への健康診断とアンケートを継続的に実施することになっているのですが、今の時点で既に、多い人で避難所を10回転居していることが分かっています。ここは一杯だから駄目ですとか、町から出てくださいとか言われたようです。先ほど、岩手県は四国4県に匹敵する広さがあるとお話しました。沿岸部から盛岡市内の中心街に行くために110kmもの距離があります。その盛岡市には温泉があります。花巻温泉やつなぎ温泉などたくさんあるのですが、そういった所にも避難した方がいました。相当な距離を移動しております。

これまでの研究では、そういった転居回数が多いと、認知症の発症が10年早くなると言われています。ですから、私がお話したように、住む場所というのは単に私たちが寝たり起きたりするだけの場所ではないということです。生きていくために非常に大事な要素で、そこを転々とさせられた場合には健康障害が起きることが分かりました。

そこで、今研究を続けているのですが、例えば血圧が上がっている人は不眠になります。眠れないのです。それからトラウマが起こる。避難所のような鉄筋の丈夫な建物の中にいた時は震度3くらい余震は余り感じなかった。しかし、仮設住宅に移ると、仮設の場合には余り土台がしっかりしていませんから、震度1であっても、お子さんがお母さんにしがみつかなければいけないような不安を感じるようです。あとはペットを連れてくる飼い主の方たちは、避難所に入ると他の人の迷惑になるというので野宿していました。そのような状態になりますと、震災によって財産を失った、また身内を亡くされただけではなく、その後のその人たちの置かれる状況や健康を阻害することなども問題となってきます。先ほどの私の基調報告では、非常に言葉足らずであったと思うのですが、避難所であっても、何か所も転々とさせることの無いように計画を立てなければいけないとお話させていただいております。

また、私たちが今住んでいる場所、住処ですね。そこを、本当に安心できる住処にしていかなければいけないなと思います。今、計画が思うように進んでいない復興住宅、災害住宅の建設。その工程が遅れば遅れるほど住民の方たちの不安が募ってきますし、生きていくことに対して自信を失う状態になってしまいます。転居回数だけを気にするのではなく、安心して住むことができる場所を確保

するということも考えていかなければいけないと思います。以上でございます。

【稲積】

次は近江さんへの質問です。「新聞と言えばマスコミと言われるわけですが、あの大地震の極限状態の中で、あえて手書きの新聞を作られたその発想といいますか、その思い付きはどのようなところから出たのでしょうか」

【近江】

初めから手で書こうとは思っていませんでした。とにかく、当時社屋の2階から下を見たときに、多くの車やがれきを巻き込んだ1.5メートルぐらいの高さの津波を見ました。余震が続き、背後からも水が来ており、津波が行ったり来たりして潮が上がったり下がったりしている中で、潮の動きが止まった時がありました。潮が膝下ぐらいの高さでしたので、街でどのようなことが起きているのかを自分の目で確かめたく、社屋にあった自転車で山を登り、石巻駅周辺を見に行きました。駅からどの方向に行っても、多くの人々が水際まで被災現場を見に来ていました。次の日には駅前周辺は水没してしまったのですが、この時から増水が始まっていました。そして、日が落ちて暗くなってくると、寒くなってきました。駅前から社屋まで自転車で20、30分位の距離なのですが、ほとんど乗ることはできず、自転車を押しながら歩いていきました。途中、石巻市の総合体育館の前を通り掛かりました。そこは避難所に指定されていたのですが、天井が落ちてしまったことで、避難してきた人たちが外に出されていました。当然そこにはいろいろな方が寒さに震えながら身を寄せていました。そのような光景をずっと目にしながら社屋に戻ってきました。

そこで、せっかく生き延びた命を、また情報の無い中で、二次災害、もしくは命を落とすようなことが無いように、報道に携わる者として、何かをきちんと伝えなければならないと思いました。会社に戻っていろいろと考えていたのですが、断水、停電、輪転機が水没しているという状況の中、私たちが使えるものとして残っていたのは紙とペンしかありませんでした。

石巻の市街地で水に囲まれているエリアは大体把握していたので、そこにある大きな中学校が2つと、高校2つには、避難している多くの人々がいるのではないかと、容易に想像できました。ですから、最低限そのエリアだけでも、情報を発信することで守りたいと思い、手書きで新聞を作成しました。先ほども言ったのですが、我々には情報を発信し続ける責務があり、それをしないということは、平時でも我々が存在する意義が無くなるのではないかと、という恐怖感がありました。ただ手で書くことについては、誤った情報を書けば手書きであるゆえに、本来の姿に戻った時に信頼を失うのではないかと、という怖さもありました。ですが、やはり先ほども申し上げたように、命に関わることでもあるので、手書きでの新聞の発行を決意しました。

【稲積】

ありがとうございました。もう一つだけフロアからの御質問させていただきたいのですが、これは友廣さんに対してです。

これは質問というよりも、うれしい木霊（こだま）がこの会場から帰ってきたと大変うれしく思っているのですが、千葉県の方からです。「(千葉県) 船橋市のイベントで東北支援ブースがあります。物販で何かお手伝いできればと思っています。OCICAいいですね。でも少し高価かな。ストラップとかありますか。連絡取れたら助かります。石巻のいいものをたくさんの人に知ってもらいたいと思います」こういうお声もありますが、どうぞお答えください。

【友廣】

ありがとうございます。そういったお声をいただけることで、僕らの作っているものも広がっています。お手元の封筒に入っている私どものポストカードに、ホームページのアドレスやメールアドレス

スが載っていますので、よろしければそちらにお問い合わせください。少し高価だということにつきましては、浜のお母さんたちの収入となることを考えますとなかなか安くすることは難しい。先ほど紹介させていただいたミサングも、実は鮎川浜のお母さんが一人だけで継続して作っていたりしていることもあり、大量生産はなかなか難しいものがあります。あと、先ほどの基調報告では触れませんでした。今東北で震災の後に始まった手仕事の動きを紹介するWEBサイト「東北マニファクチュール・ストーリー」を立ち上げました。岩手から福島まで、それまで別の仕事をしていた方が、震災を機にもの作りを始めた方が結構いらっしゃいます。いろいろと失ったからこそ始まったもの作りの物語を、今一つ一つの現場を回りながら取材して発信しております。それらについても、一部御紹介できると思いますので、よかったですら御連絡いただけたらと思います。

【稲積】

ストラップはどうか。

【友廣】

ストラップについては、僕らが関わっていないところで作られていて、形も値段の幅もいろいろありますのでよろしければ御紹介します。このシンポジウム終了後、客席辺りにいますので、よかったですらお声をお掛けください。ありがとうございます。

【稲積】

様々な御質問をいただき、御来場の皆様に御礼を申し上げます。

それではパネルディスカッションですから、ここではパネリストの皆さん同士でお互いに質問もあると思いますし、あるいは、それぞれの発言に対して、自分のお考えもあると思います。また、最初の基調報告が20分という限られた時間で、皆様の御体験、御活動の内容からすれば、まだまだお話しされたいことがたくさんおありだったと思います。ですので、補足も含めて結構でございますから、この時間を利用したいと思います。それではパネリスト同士で何か御質問なり補足がございましたらどうぞお願いいたします。はい、鈴木さんお願いします。

【鈴木】

補足をさせていただきます。被災状況によって抱える問題の違いについてお話させていただきます。本日のパネリストの方たちと同じく、外から被災地に入ってきた多くのボランティアの方たちが、どのようにして被災された人たちの心を勇気付けたかというお話の一篇です。

家が全壊してしまった方たちは、我が家もそうだったのですが瞬時に津波に流されましたので、我が家の跡地から見付かったのは仏壇のろうそく台1本だけでした。あとは、全て綺麗さっぱり無いですね。その失ったもの、喪失感とか絶望感というのは、レジュメにも書いてありますが、ふとした時にひょこひょこ顔を出します。ちょっとしたことで顔を出してくる。意図的に思い出そうとしなくても、ちょっとしたことをきっかけに外部から入ってくるのですね。例えば花が咲いているのを目にすると、ああ我が家の庭にもこの花あったよねとか。それから何か食べようと思った時に、あの皿があったよねとか。この会場にいらっしゃる被災された方も同様だと思うのですが、そういった喪失感とか絶望感というのは、水道の蛇口をひねった時に水が出てくるように、突然襲ってきます。これは消えることは無いだろうなと思っています。ただし、対処の仕方を工夫することはできると思います。

それから、家が半壊または浸水した方の場合です。半壊や浸水すると、家財などを全て外に出して洗浄したり、ヘドロや泥を掻き出すのに人手が必要でした。皆さんも被災されてお分かりになると思いますが、今回の震災は大規模災害ですから1階が天井くらいまで水に浸かると、大変な悪臭がします。高齢の方が住んでいる家は、大体1階は畳の部屋になっています。すると、畳の洗浄は非常に困難なため、なかなか後片付けができない家が多かった。住んでいる人も諦めてしまうのです。そ

こに、全国からボランティアの方たちが入ってきました。本当に有り難かったです。自分たちだけで畳を起こすといっても重くてもう外には出せませんし、家財道具を出すだけでも大変な重労働です。外に出すことができても臭いが取れなくて、絶望的な状況でした。そんなところに、たくさんのボランティアの方たちが来てくれて、家の後片付けを手伝ってくださった。そういうことができたのが、半壊や浸水の家でした。このことを教訓に最近では、1階をフローリングにして、2階を畳の部屋にしている家が増えました。

では、家が壊れていない所はどうか。この津波というのは、現場にいた方は分かると思うのですが、海岸線に近い同じ集落の一角であっても、海面からの高さ（海拔）が異なる所があります。わずか半径3メートルくらいの範囲に、全壊した家、半壊した家、全く被害が無い家が立ち並んでいるわけです。被害が無い家は良かったじゃないかと思いますが、そうではないんですね。罪悪感が生まれるのです。サバイバーズ・ギルト¹に襲われるのです。なぜ我が家だけが残ったのだろう。罪悪感から、外から見える所に洗濯物が干せなくなったり布団も干せなくなる、そういう時期が長期間続きます。それから岩手でも、60年に1回は大きな津波が来るぞとずっと言われ続けていたこともあり、いつかは来ると思っていたのですが、まさかこんな大きな津波だと思っていませんでしたから、多くの方が命を失いました。「津波てんでんこ」という津波文化の言葉があります。こちら（石巻）にもあるのではないかと思います。津波が来たら人のこと考えないで逃げろよという意味です。高い所へ逃げるのだよと言われて育ってきました。ですが、それは50歳代後半以上の方しか知りません。若い方にとっては死語のようになっておりますので、そういったこともあって、たくさんの命が失われたのだと思います。最後に、私たちは「被災したのか?」「全壊したのか?」「半壊したのか?」「家助かって良かったね」という言葉は使えないなということが分かりました。そういう被災者の心の中を御理解いただければ有り難いなと思っています。

【稲積】

それでは、私からも一つ。どなたにお答えいただいても結構ですが、私は今、福岡県の太宰府市教育委員長を務めさせていただいております。太宰府市と宮城県多賀城市は古都ということで姉妹都市の関係にございます。昨年（2012（平成24）年）秋に私たち太宰府市教育委員会から多賀城市にお見舞いと視察と激励に参りました。その時に、多賀城市のある小学校の校長先生からお聞きしたことなのですが、その小学校も避難所になっておりました。震災直後には避難所でお弁当を配ったり、高齢者のお世話をしたり、かいがいしく働いている一人の青年がおりました。その青年は、震災の前は引き籠もりでずっと家にいたそうですが、震災後は部屋から出て、避難所がかいがいしく活動をされておりました。しかし、その避難所の生活が少し落ち着きましたら、またその青年は引き籠もりに戻ってしまったそうです。

また、震災直後は、不登校など子どもたちの様々な問題行動が無くなりましたが、2年近く経ちまして、また不登校などの問題行動が以前と変わらないように発生し始めたというお話を聞きました。

その話を聞いた時に感じましたのは、鈴木さんも先ほどおっしゃいましたが、これからは心のフォローアップをどのようにしていくかということを感じたのです。

2年半経ちまして、皆さま方は現地で何か感じておられることがありましたら是非教えていただきたいと思います。どなたからでも結構です。奥田さんいかがでしょうか。

【奥田】

そうですね。私どもは、野宿者の支援を、ハウスレスとホームレスは違うという考えを前提に25年間ずっとやってきました。今回の被災者支援においても、その考え方を念頭に活動を行っています。

1 Survivor's guilt: 戦争や災害、事故、事件、虐待などに遭いながら、奇跡的に生還を遂げた人が、周りの人々が亡くなったのに自分が助かったことに対して、しばしば感じる罪悪感のこと。

野宿者の支援をしていて大きく二つの課題があります。大体支援をするときには、まず見立てが大事で、何が困窮しているのかという、そこが勝負なのですが、今回の東日本大震災の被災状況は、二つの困窮がそこに絡んでいると思っています。一つは家が無い、野宿ですから食べ物が無い、着るものが無い、そもそも仕事が無い。家が無い状態で就職できる会社はありません。家が無くなるというのは決定打です。

野宿者支援でも、そういう方を長く支援してきました、炊き出しから始めて再就職の支援等々、今は総自立者数が2,500名を超えました。しかし、実際アパートに入居された後が勝負です。つい先日まで数年間路上で暮らしていた人が、アパートに入って再就職するわけですから、訪ねていくと本当に見違えます。台所を見るとお味噌汁なんか作っていたりするわけですから、すごいなとびっくりします。真っ黒けの顔をしていた人がえらく美白になっていたりするわけです。ですが、良かったですねと言ってそのアパートを訪ねて帰る瞬間に、一人でポツンと座っているおじさんの姿が見える。それが数日前、路上で駅の通路で座っていた日の姿とかぶって見える。何が解決できて、何が解決できていないのかが問われていたのです。路上にいる時には畳の上で死にたいと、死に場所の話がされていて非常に印象的だった方でした。私たちの活動の「自立の概念」は五本柱で構成しているのですが、五本目の柱は「一人で死なない、一人で死なせないというのが自立だ」としています。20年ほど前に書いたことです。死ぬ時の話は、本当に大事なのですが、畳の上で死にたいと路上の時はおっしゃるが、アパートに入って「これで畳の上に上がってよかったですね」と言うと、次は「俺の最後は誰がみとってくれるだろうか」という話になるのですね。

そこに現れるもう一つの問題は、やはり“ホーム”の問題でありまして、これは“ハウス”ではない。“ホーム”と呼べる人間関係が無いのです。現在、様々な社会制度もありますし、社会資源もありますが、社会的関係資源というのは、極まるころはやっぱり人なのだろうと思います。最後死ぬ時に、誰が横にいてくれるのかということが、野宿者支援において勝負でありまして、そこにはハウスレス問題というものと、ホームレス問題の二つの問題がある。ですから私たちは、今回被災者支援とか被災地における活動においても、この人には今何が必要かということを一方で徹底的に追及しています。

例えば牡蠣の養殖を復興するにはまずロープが必要なのですが、ロープの切れ端をもらって帰って、あらゆる所に同じものがないかと注文を出して、何kmというロープを調達する。これは当時大変だったのですが、でももう一つの課題は、この人には「何が必要か」ということだけではなくて、この人には今「誰が必要か」という、この「何が必要か」というのと、「誰が必要か」というこの二つの問いに、同時に答えることができるかどうかなのです。単に路上生活（ホームレス）の問題だけではなくて、私は被災地においてもそうですし、ひょっとすると家を失っているというような極限の状況ではないけれども、“ホーム”を失っているという状況がずっと続いている方は多くいると思います。

私は関西出身ですので、阪神・淡路大震災の支援にも関わっていたのですが、震災後、孤独死や自殺の問題がたくさん出てきました。例えば、阪神・淡路大震災の時には、共同型仮設住宅というものを作りました。居室の中に共同台所を一つわざわざ作って、そこで無理やり顔を合わせるような仮設の建て方をしていました。ですから、やはりこの“ホーム”の問題が大事なのです。

ただ、そこでもう一つの問題があるのは、私が先ほど言いましたように、誰かが私のために助けてくれるというのは、自尊感情と言いますか、自分が大事にされているという感情を得るにはすごくいいのですが、そればかりやると助けられっぱなしで萎えてしまうのです。そうすると、もう一つの自己有用意識と言いますか、自分は必要とされているという、その役割の確認がその誰という作業の中に非常に大事になるのです。

被災直後、引き籠もりの青年が避難所で暮らしていた話をしましたが、ひょっとしたらそこには役割があったのかもしれないなと思います。それが無くなった、見えなくなった瞬間に再び自分は必要とされていないのではないのかという気持ちに戻ってしまう。今、私は九州で路上の青年たちの再就職支援に奔走しているのですが、それも助けられっぱなしの構造では絶対にだめで、彼らがどういう役割を担うかということが、非常に大事ななというふうに向ってありました。

【稲積】

ありがとうございました。近江さんにお尋ねしたいのですが、近江さんたちが出された壁新聞ですね。壁新聞6枚とお聞きしましたが、その6枚が海外でも高く評価されて、どこかに提示されている保管されているという話も聞いたのですが、今、6枚の壁新聞はどうなっているのでしょうか。

【近江】

そうですね。毎日6枚書いて、6か所に貼り出しておりましたので、本来6セット残っているはずなのですが。震災後、時間が経つにつれ交通の便が良くなってきて、もう少し掲示エリアを広げたいと、前日見ていただいたものを違う所に持っていったりしていました。また、当時車も人のものを借りたりしていたため、フロアマットを汚さないように壁新聞を下に引いていたりとか、避難所のゴミにならないように貼りっぱなしにしたりしていました。そのような中で、何とか3セットだけ押さえることができています。

ワシントンのニュージウムという新聞博物館に1セット、それから横浜の日本新聞博物館に1セット、それと石巻市に石巻ニューゼ（運営：石巻日日新聞社）という人が集まれる場所に無償で1セット展示して地域内外の皆さんに見てもらえるようにしてあります。

【稲積】

それから鈴木さんにもう一つお尋ねしたいのですが、御報告の中に全戸家庭訪問健康調査の結果、高齢者の支援必要理由で最も高かった「心のケア」が37%あったことについて、その心のケアというものは具体的にはどのようなケアなのでしょう。

【鈴木】

宮城県の場合も立ち上がっていると思うのですが、大規模災害時には、いち早く心のケアが必要だろうということで、随分ディスカッションされて実現化しています。岩手県の場合では、沿岸の4保健所を拠点にしてこころのケアセンターを立ち上げています。

岩手県内の大学の精神科を中心に、全国から多くのスタッフを集めながら行っているのですが、この心のケアというのはなかなか進まないことはお分かりですよ。東北人は無口で控えめなのです。こういう場でお話をするのも非常に苦手なのですが、そういう心の問題というのは、特に浜の人たち、海で働いている人たちというのは、がらがらと元気よく話をしているようですけど、心の中は非常に控えめです。他人になかなか自分の心の中もお話しできないような状態だなど考えていました。

この度の津波というのは第一波で終わったわけではないですね。何回も行ったり来たりした波の中に、たくさんの人たちが流され飲み込まれていく姿も見ています。声も聞いています。「助けてくれ」って手を伸ばした人がいたのですが、自分も引き込まれてしまっただけで、その手を引っ張れなかった。そういう非常に重い経験をお持ちの方が多くいました。

私たちは、被災後2日目から入りましたので、その時はアドレナリンが出ていて興奮状態です。だから2～3日、70時間くらいは睡眠を取らなくても体が動きました。住民の方たちもそうでした。ですから直後はよく話をしてくれました。こうだったんだ、ああだったんだって。それが時間が経つに連れて、一旦心の奥に封じ込められていきました。

私は保健師でしたから、地元の人たちの声をたくさん聞いていました。そこで私は、住民に対するケアの問題だけではなく、支援に入った人たちの心のケアも必要だと思いました。ケアラー（祖父母や親などの世話をを行う無償の介護者）に対してです。彼らも、先ほどの話をしたような喪失感や絶望感を感じるのです。そこで、こころのケアセンターができました。その対応につきましては、非常に個別性が必要です。今私もやっているのですが、本当に寄り添って、隣にいて、このまま寝られる？とか、血压測ってみる？ちょっと血压高いけど何かあった？とか言いながら、日常生活の中での心の動きをキャッチすることが必要だと思っています。

それから、震災発生直後の被災している方たちの心の問題が、みんな同じだったときはまだよかったのですが、2年半が過ぎまして、まだまだ住む場所も決まらない、働く場所も見付からない、といった多種多様なストレスが複合的に絡み合い、それが引き金でトラウマになっていることが出てくるようになりました。これはライフサイクルごとに出てきますので、対応は非常に大変です。ですので、この心のケアは、ずっと続けていかななくてはいけないことなのです。どこかで区切れるものではない。そして、その被災した人たちに寄り添い、どうですか?という言葉が掛けてあげること。日常生活の中で話せる環境を丁寧に作っていかなくてはいけない。非常に個別性に神経を使って見守りしていくことが必要なのです。また、これは4、5歳ぐらいの子どもたち全員にやらなければいけないと思います。私たちの行動研究の中で、お母さんが心理的に非常に弱っていることが分かりました。子どものサインに気が付けないお母さんたちがたくさんいる。子どもの声を聞けないのです。ですから先ほども言いましたが、仮設住宅での余震が避難所の時と違ってカタカタとすると、子どもはもう怖くてお母さんをつかみますよね。だけれども、それを振り払ってしまうお母さんの心情があるということを理解しなければいけない。

それから、大槌町の役場職員が40人亡くなったのですが、今残っている職員の方たちの多くがうつ病になっています。その人たちの心のケアをしていかなければいけないのですが、うつ病による負の連鎖を断ち切るためにも、家庭内のパッケージで心のケアが必要だということも分かってきました。ですから、非常に個別性で丁寧に見守る。見ているよという言葉が掛ける。そういうケアが震災に関わった全ての人に必要であると考えています。

【稲積】

ありがとうございます。最後に奥田さんと友廣さんにお尋ねします。先ほど奥田さんは、あえて「偏った支援」という言葉をお使いになりましたし、お二人とも小さな場所で相互交流して活動しているのですが、お二人がやられていることは、限定された場所に見えますが、私から考えますと大変普遍的な可能性を持っている取組ではなかろうかと思うのです。そういう意味ではそれはかなり壮大な実験であり挑戦であると感じますが、これからの日本社会全体で考えたとき、今取り組まれていることがどういう可能性を生むか。そういうことをお考えになっていただいているのかどうか。一言ずつお聞きしたいと思います。

【友廣】

はい、ありがとうございます。僕は、震災前は全国の農村や漁村を回らせていただきながら、そこで求められる役割をいろいろと果すようなことをしていました。フリーランスとして魚を売ったり野菜を売ったりなど、そういうことをやっていたのですが、その時から感じていたのは、地元の人たちが何かやってみたいと思ったとしても、「お金が無いからできない」となる。「国のお金が取れたらやれるんだけどね」みたいな、結構そういう言い訳のような考えになってしまうところがあります。

今回、OCICAの話の最後に、今回の支援活動の実質的な自己投資は5万円以下しか掛かっていないと紹介させていただきましたが、この震災の後、僕ら自身も何も持っていなくて、お母さんたちも何か持っているわけではなくて、そこにあるものでまず一歩踏み出してみよう、というところで始めたのです。ホームセンターで糸のこぎりとか丸のこかを買ってきて、そこでまず手を動かし出した。そこから物語といいますか思いをきちんと伝えていくことで、どんどん人と人の縁が広がって、みんな無理なく差し出せるものを差し出してくださって、僕らも差し出して行って、それで事業が形になっていった。このプロセスは今言っていたように、ほかの地域の人たちにも何か逆に参考になるというか希望になるようなことになればいいなと思って、そういう意味もあって去年本も書かせていただきました。ここから新しく生まれてきているこの動きは、また違う形で伝えていきたいなと思っています。

【稲積】

では、奥田さんどうぞ。

【奥田】

そうですね。私が「偏った支援」と言った時にやはり議論があったのですが、一人のスーパーマンみたいな人が100人の人に対応するのではなくて、100人の人が100人に対応したらいいのだ、と言いました。それが社会であって、1つの団体が100のプランをカバーするというのは実際できないし、一方でそういうことはやってはいけないのではないかなと思っています。それってどうしても支配の構造といいますか、力の構造が生まれてしまう。そうではなくて、小さな出会いが100生まれればそれでいい。友廣さんがされていることは素晴らしいと思うのですが、やはりモデルなのだと思うのです。先駆的なモデルをどうまねるか、そのまた隣のところでどうアレンジするかというのが非常に大事だと思いました。

それとこれはホームレスの人たちを見てもそうなのですが、少しロマンチックな言い方をしますが、ホームレス経験でさえ私は一つの経験談だと思うのです。困窮状況に追い込まれた人たちしか持っていないのです。先ほど「東へ」ではなくて「東から」という視点を自分自身学びましたと申し上げたのですが、何か悲しんだ人とか苦しんだ人、本当に心が傷ついて、それは本当に癒されなければいけないのだろうけれども、しかしそれにしても彼らしか見えていない世界といいますか、認識における特権性みたいなものがありまして、それがかたや関心を持っていない人たちが乗り込んでいって支援だ支援だと言っている、決定的に見えていないもの、感じられないものがあるのです。私はそこからきちんと聞くことがこの国を変えていくと思うのです。本当にゆとりのある人が苦しい人を助けていくみたいな温かな国になるのではなくて、何かそこで悲しんだものしか持てない認識における特権性みたいなものから、逆にどのようにして日本社会が復興するかというのが勝負なんだろうと思っています。

【稲積】

ありがとうございます。

それでは一言だけ締めくくりの言葉を述べさせていただきたいと思います。今回、「絆」ということが大きなテーマになりました。一言で「絆」とは言いますが、それは人権という視点で捉え直したときに、大変大きな意味を持ちます。奥田さんの言葉を借りれば、「絆」とは『相互多重性』であるという、大きなキーワードを示していただきました。昔から言われている「絆」というものは同質性を前提とした一面があるのですが、これからの「絆」というのは多様性を前提としたものでなければならないのではないかと私は思います。

特に震災時におきましても震災直後の皆が極限状態という同質性の上に立った「絆」から、その後、時が経つにつれて今こそ多様性を前提とした「絆」へ変化していくということの結び直しもまた大事ではないかと感じました。

そして皆さんの取組内容をお聞きしながら、私はマザー・テレサの言葉をずっと胸の中で反芻しておりました。マザー・テレサは「私たちのすることは大海のたった一滴の水にすぎないかもしれませんが、その一滴の水が集まって大海となるのです」と言っておられます。このマザー・テレサの言葉を改めて私はかみしめたいと思っています。

これで今日のシンポジウムを終わりたいと思います。長時間皆さん熱心に御清聴ありがとうございました。

*このシンポジウムの「パネルディスカッション」の様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

●関連情報

- * 公益財団法人共生地域創造財団 <http://from-east.org/>
- * 北九州ホームレス支援機構 <http://www.h3.dion.ne.jp/~ettou/npo/>
- * 東八幡キリスト教会 <http://homepage3.nifty.com/higashiyah>
- * 奥田知志ツイッター <https://twitter.com/tomoshiokuda>

- * つむぎや フェイスブック <https://www.facebook.com/TUMUGIYA>
- * マーマメイド <http://mermaid.com/>
- * OCICA <http://www.ocica.jp/>
- * 東北マニュファクチュール・ストーリー <http://www.tohoku-manufacture.jp/>
- * 友廣裕一 フェイスブック <https://www.facebook.com/yuichi.tomohiro>
- * 友廣裕一 ツイッター <https://twitter.com/tomohy>

- * 石巻日日新聞 <http://www.hibishinbun.com/>
- * 石巻日日新聞（号外） <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/26>
- * 「石巻日日子ども新聞とは？」 <http://kodomokisha.net/kodomoshinbun/>
- * 石巻日日新聞 編集制作部 ツイッター https://twitter.com/ishihibi_edit
- * 石巻日日新聞 フェイスブック <https://www.facebook.com/hibishinbun>

- * 東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト
<http://www.zenhokyo.jp/201103quake/ho...>
- * 保健師による東日本大震災復興プロジェクト
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/phn/i...>
- * 「岩手県大槌町民の健康状態把握のための訪問調査」に基づく提言（第一報）（PDF）
<http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...>
- * 「大槌町 保健師による全戸家庭訪問と被災地復興」（PDF）
<http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...>
- * 平成23年度東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト活動報告書
<http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...>
- * 平成24年度東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト活動計画書
<http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...>
- * 東日本大震災女性支援ネットワーク
<http://risetogetherjp.org/?p=1660>